

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 42

カルヴィーノとモンターレ

堤 康徳

ジェノヴァが生んだノーベル賞詩人エウジェニオ・モンターレ(Eugenio Montale, 1896-1981)。第一詩集『烏賊の骨』(*Ossi di seppia*)は、反ファシストの知識人ピエロ・ゴベッティが創設した出版社(Piero Gobetti editore)から1925年6月に刊行された。モンターレが、クローチェの起草した「反ファシズム知識人宣言」に署名し、ファシズム体制にたいして旗幟を鮮明にしたのは、そのひと月ほど前のことだった。

モンターレは、イタロ・ズヴェーヴォの文学をイタリアで最も早く評価した批評家としても知られる。同じく1925年に、文化誌『レザーメ』(*Lesame*)に発表した書評「イタロ・ズヴェーヴォへのオマージュ」が、ズヴェーヴォ文学評価の先駆けとなったのである。

カルヴィーノは、彼が愛読する古今の詩人たちのなかでも、同じリグーリア出身でその海の光景をしばしば歌ったモンターレにことさら強く惹かれているように思われる。

『烏賊の骨』所収の「レモン」(*I limoni*)という1921年の詩をすべて訳出してみよう。モンターレの詩はその難解さで知られるが、この作品は比較的わかりやすいといえなくもない。

どうか聞いてほしい、桂冠詩人たちは
あまりなじみのない草木のなかを動いている。
ツゲやイボタノキやアカンサスなど。

私自身は草ぼうぼうの溝に通じる道が好きだ
少年たちが
やせたウナギをつかまえる
半ば干上がったその水たまりが。
溝が縁取る小路、
葦の穂のなかを下り
野菜畑へ、レモンの木々へと通じる小路が。

鳥たちのさんざめきが消えればなおよい
青空に呑みこまれて。
そうなれば、ほとんど動かない大気のなか
親しげな枝のささやきが
もっとはっきりと聞こえ
地面から離れようとしないこの匂いの感覚
不安な甘さが胸にふりかかる。
ここでは逸楽の情念の葛藤が
奇蹟によって沈黙し、
われわれ貧者にも、相応の富が与えられる
それがレモンの香り。

見よ、事物が沈黙し、
その最後の秘密を
今にも明かそうとするとき、
見つけられそうな気がする
自然の過ち、
世界の死点、鎖からはずれそうな輪、
ついにわれわれを現実のさなかに導く

ほどくべき糸が。
視線はあたりをさぐり、
記憶は調査・調整・分離を行う
弱まりゆく日差しを浴びて
広がる香りのなか。
沈黙のなかだ
遠ざかるすべての人影のなかに
混乱した神性らしきものが見えるのは。

だが幻想が消え、時間がわれわれを連れ戻す
喧騒の街中に、そこは青空がとぎれとぎれに
しか現れない、頭上の軒下の装飾に囲まれて。
雨が土地を疲弊させ、それから、
屋上で冬の倦怠が深まり
光は弱まり、魂がにがみを帯びる。
ある日、半開きの門から、
中庭の木々のあいだに
レモンの黄色が現れる。
心の氷が解け
胸に響きわたるのは
彼らの歌
燦燦と輝く黄金の喇叭。

1 行目の「桂冠詩人たちは」、ことさら崇高な雅語を用いる同時代の詩人たちを指すと考えられる。その代表的な存在がダンヌンツィオであろう。「桂冠詩人たちは」の雄弁な身振りに比べ、モンターレのそれはそっけない。モンターレの選ぶ詩語は、日常的でむしろ卑近ではあるが、手触りのざらざらとした硬質な言葉から成り、それが描くのは、身近な、手の届くところにある光景である。しかし世界が、ふだんは見せない真の姿を思いがけない事物の相貌をとおして垣間見せる瞬間をも、同時に浮かび上がらせる。まるで「奇蹟」(第2詩節9行目)のように。遠ざかる人影に宿る混乱した神の姿(qualche disturbata divinità)、冬のか細い日差しを浴びて輝くレモンの実は、過酷な現実のなかにかろうじて見出される救済の象徴なのだろうか。ただし、モンターレにとって、魂の救済は必ずしも宗教に求められるものではない。

モンターレと同じジェノヴァ出身の詩人、エドアルド・サングイネーティ(Edoardo Sanguineti, 1930-2010)が、モンターレの詩学の中心にある

のは、「神聖さの寓意の数々が魂の歴史の世俗的な読解の構築のために有用でありうるという賭け」¹だと述べているとおりである。

詩集のタイトルとなった「烏賊の骨」は、黄金の喇叭としてのレモンとは対照をなす。それは、海岸に顕現したまぎれもない生物の残滓である。逆巻く波に洗われ、岩に砕かれ、砂浜に打ち上げられた透明で薄っぺらの烏賊の骨(生物学的には、プラスチックの下敷きのようなそれは、骨ではなく軟甲であり、殻の一種だというが)はまた、無益な漂流物であり、海の遺物あるいは残留物ともいえよう。他の生物の餌食となって、ついには骨の断片と化した生き物は、困難な時代の波間を漂うあまりにも頼りない人間存在の象徴でもあるかもしれない。



【エウジェニオ・モンターレ】

出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Eugenio_Montale

18歳の頃、モンターレの初期の詩を数多く暗唱したというカルヴィーノが、『烏賊の骨』の一篇について独自の読解を試みた文章が、カルヴィーノの死後出版された評論集『なぜ古典を読むのか』

(*Perché leggere i classici*, Milano, Mondadori, 1991. 須賀敦子訳、みすず書房、1997年)に収められている。読解の対象となったのは、「おそらくある朝、ガラスの空気のなかを歩きながら」の一行で始まる一篇である。なぜこの一篇なのか？カルヴィーノによれば、とりわけ彼の「記憶のレコードプレーヤー上を最も頻繁に回転し続けた」²詩だからだという。

ふたつの4行詩節から成る題名のないこの詩をまずは訳出してみよう。

おそらくある朝、乾いたガラスの空気のなかを歩きながら/振り返れば奇蹟が起きるのを私は見るだろう。/私の背後の無、私のうしろの/真空を、酔っぱらいの恐れとともに。

それからスクリーン上を次から次へと現れてくる/木々、家々、丘のつらなりが、いつもの錯覚によって。/だがきっと遅すぎるかもしれない、私は黙って立ち去るだろう/振り返ることのない人々のあいだを、私の秘密をかかえながら。

カルヴィーノの読解においてここでとりわけ興味深いのは、モンターレの詩にける「奇蹟」の分析である。

よく見れば、「奇蹟」を出現させるバネは、自然の要因、つまり空気中の要因である。冬の空気の乾いたガラスのような透明性が、事物をくっきりと浮かび上がらせて非現実の効果を生み、通常は風景(ここで私は再び、モンターレの詩、初期のモンターレの詩を例の海岸の風景のなかに置いて、私の記憶のなかにある海岸の風景と重ねてみる)をぼやけさせる霧の光暈が、存在の厚みと重さにほとんど一体化するのである。³

「奇蹟」は、モンターレが初期からずっと抱き続けたテーマであり、「破れた網の目」(la maglia rotta nella rete)や「鎖からはずれそうな輪」(l'anello che non tiene)と同義であるが、ここでは、詩人が経験世界の堅固な城壁の向

こう側に出現させるもうひとつの真実が定義可能な経験として現れる、まれなケースのひとつである。⁴

「破れた網の目」と「鎖からはずれそうな輪」という言葉はそれぞれ、『烏賊の骨』冒頭に置かれた詩「初めに」(*In limine*)と、上記訳出した詩「レモン」のなかにある。カルヴィーノは言及していないが、晩年の詩集『サトゥラ(諷刺詩)』(*Satura*, 1971)所収の「歴史」(*La storia*)にも、次のように同様の表現が見られる。「歴史はほどけていかない/とぎれることのない/輪の連鎖のようには。/いずれにせよ/多くの輪がゆるんでいる」、「歴史は海底をひっかく/ほころびのある底引き網のように、そして逃げ出す魚は一匹ではない」。これらの詩句が示唆するのも、経験世界の向こう側にある、歴史のもうひとつの真実なのだろうか。「ほころびのある底引き網」から「逃げ出す魚」は、鎖状につながった因果の輪をぐり抜けて、歴史の連続性と必然性からめとられことから免れた人間存在を思わせる。

モンターレの詩の引用はすべて次の版に拠る。

Eugenio Montale, *Tutte le poesie*, Milano, Mondadori, 1984.

¹ *Poesia italiana del Novecento*, vol. II, a cura di Edoardo Sanguineti, Torino, Einaudi, 1993, p. 893.

² Italo Calvino, *Eugenio Montale, Forse un mattino andando*, in ID. *Saggi*, Tomo II, Milano, Mondadori, 2007, p. 1179.

³ *Ibid.*, pp. 1180-1181.

⁴ *Ibid.*, p. 1182.

(上智大学准教授)

チーム愛？

谷口 和久

先日たまたま立ち寄った食堂でローマの町巡りのテレビ番組が放映されていて、ついつい見入ってしまった。

ローマといってもコロッセオやヴァチカンなどの名所旧跡めぐりではなく、パルや町中の水飲み場で人なつっこいローマっ子たちとふれあうといったような内容だった。ちなみに、ローマの水飲み場は、古代ローマ時代に張りめぐらされた水道がベースになっているので、ある種の「旧跡」ではある。

さて、その町巡りの中で、サッカーの AS ローマチームのファンクラブを訪れるシーンがあった。AS ローマは、かつてはトッティや中田英寿も在籍した、セリエ A 屈指の名門チームである。

ファンクラブのインタビューでは、ティフォージが AS ローマ愛をしきりにうたっていて、画面からも熱さがひしひしと伝わってくるほどだった。そんな中、ひとりのおじさんがこう叫んだ。

「女房は変えられるが、愛するチームは変わらない！！」

すると周りの男たちが(女性も)「オーッ！！！」と雄たけびをあげて、ボルテージは最高潮。案外こんなことをいっているおじさんにかぎって、家では奥さんに頭が上がらなそうだが。

ところで、おじさんのこの雄たけびを聞いて、「自転車レースではこういうセリフはありえないな」と感じた。というのも自転車のロードレースでは、チームがコロコロ変わるため、「チーム愛」というものがほぼ存在しないのである。

サッカーでも、もちろんオーナーが変わることは頻繁にあるだろう。近年では中近東や中国系の企業がオーナーになるケースも多いだろうが、

チーム名や拠点が変わることはまずありえない。AS ローマ、AC ミラン、フィオレンティーナ、いずれもその町々に根差したチームである。イタリアにかぎらず、スペインのバルサしかり、イギリスのマンチェスター・ユナイテッドしかりである。



【フランチェスコ・トッティ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Associazione_Sportiva_Roma

野球もそうだ。ジャイアンツは東京、タイガースは関西。こういってはなんだが、そこまで土地に根差していないチームが地方に移転してもさして問題はないと思われる。ホークスやファイターズでは実際問題なかっただろうし、メリットも多々あったことと思われる。しかし、ジャイアンツとタイガース(それにカープとドラゴンズ)が、よその土地に移ることは想像もできない話だ。アメリカの大リーグも同様だろう。

ところが、自転車の場合、オーナー企業が変わると、チーム名も本拠地もガラッと変わってしまうのである。

ツール・ド・フランスやジロ・ディ・イタリアといったビッグレースに出られる資格を持つチームは「ワールドチーム」とよばれ、2023 年度には 18 チームが登録されている。

この中で私が自転車レースに興味を持ち始めた 1990 年代から変わらず残っているのは、フランスのコフィディスと AG2R という 2 チームだけである。なお、これら 2 チームも、これまで戦績等によってワールドチームから外されたこともあった。

そして今年の 18 チームの中にイタリアのチームはなんとゼロ。もちろんイタリア人選手たちはおのおの各チームに所属しているが、1990 年代にはイタリア籍のチームに所属するイタリア人選

手たちがレースで暴れまくっていたということもあり、どことなく寂しいものがある。

さて、比較対象としてサッカーや野球を挙げたが、お気づきのように、これらはスタジアムで行う競技だ。スタジアムがあれば当然「わが町のチーム」という意識がなじみやすい。

かたや自転車のロードレースはあちらこちらの公道で行われる。むしろ地元で行われることの方がまれた。

レースの中心はこんにちでもヨーロッパだが、近年は中近東やアジアあるいはオーストラリアなどでもレースが開催されている。ヨーロッパ内でも、今週はフランス、来週はイタリアというのが日常茶飯事だ。ファンたちが地元チームのレースを目にする機会というのは、追っかけでもしていれば別だが、滅多にないのである。チーム名や拠点がコロコロ変わることにはさほど抵抗がないのは、このような点も影響しているのかもしれない。

話はそれるが、自転車ファンというのはどこかしらコスモポリタンのとかアナーキーとか根無し草なところがあるように思う。かたやサッカーファンは思いっきりドメスティックでありヤンキー的だ。

さて、ロードレースのようにホーム(競技場)がなく、あちらこちらに転戦し、かつチームで行われるスポーツは他に何かあるだろうと思いついてみたが、いまひとつピンとくるものがない。

しいて挙げれば駅伝だが、これはおそらく日本でしか行われていないだろうから、ケースとしては特殊だ。気になって調べてみたところ海外でもちらほら大会はあるようだが、大会名もほとんどが「〇〇 EKIDEN」と名付けられていて、やはり日本独自のものであるようだ。

そして、駅伝の応援の図式は、自分の母校や勤務先のチームといった特殊なケースを除けば、がんばっている選手たち全員を応援しているのではないかと思う。

これは自転車レースもほぼ同じだろう。メディア、特にテレビ放送を見ているかぎりでは、どうしても先頭で活躍する選手にばかり目が行きがちだが、現地で、ことに山岳地帯でレースを観戦すると、盛り上がるのは、むしろ後続集団だ。前の方は、アタック合戦でもしていれば別だが、たいていが

涼しい顔をしてスーツと走り抜けていく(当人は実のところしんどいだろうが)。かたや後続集団は、それまでアシストとして激務を果たした選手たちがなけなしの力をふりしぼって必死の形相で登っていく。その姿にチームも国籍も関係なく歓声が飛ぶ。



【レース終盤 疲労困憊のアシストたち @2002 ツール】

応援の対象をあらためて整理してみたい。情熱の高そうなものから順番をふってみた。

<サッカー>

1. チーム
2. 特定の選手
3. プレイ(?)

<自転車>

1. レースそのもの
2. 特定の選手
3. チーム

というわけで、ここまでずっと「チーム愛」をテーマに話を進めてきたが、自転車については「あまり関係ない」「あまり気にしていない」というのが結論だ。暫定的に3位に入れたが、このあたりに「自転車メーカー」などが入る人もいるかもしれない(「応援」というより「関心」かもしれないが)、現実にはチームはもっと低いかもしれない。

*

ファンの立場からは、かように優先順位の低い存在だが、自転車競技を支え、成り立たせる上で、チームはぜったいに欠かせない存在だ。

スポンサーのありようとしては他にも、大会のスポンサー、自転車やパーツなど機材のスポン

サー、食料やウェアなど消耗品のスポンサー等々、様々なかたちがあるが、人を抱え長期にわたって運営していくという意味で、重要度・困難度でいえばチームのスポンサーが屈指だろう。

自転車レースが始まった 19 世紀後半には自転車(フレーム)メーカーがチームを所有していた。イタリアではビアンキやレニャーノ、フランスではブジョーなどがチームを抱え、レースでの勝利が販売増につながった。シンプルな図式だ。

この図式は第二次大戦後まで半世紀にわたって続いたが、1950 年代に初めて自転車以外のブランドがチームスポンサーになった。それはスキークリームで有名なニベア。ニベアを自転車界に呼び寄せたのはイタリア人選手フィorenzo・マーニである。



【フィorenzo・マーニ】

出典：https://en.wikipedia.org/wiki/Fiorenzo_Magni

マーニは 1940～50 年代に活躍した選手で、コッピやバルタリに次ぐ「第三の男」として名をはせた。1954 年にニベアチームを立ち上げ、翌 55 年のジロ・ディ・イタリアではコッピをおさえて総合優勝を果たした。ニベアとしても宣伝効果抜群だっただろう。

ニベア自体は 1956 年を最後にスポンサーからおりるが、その後は自転車以外の企業スポンサーが増え、むしろ一般的になっていった。ファエマ(電気機械)、モルテーニ(加工肉)、サルヴァラーニ(住宅設備)などなど。そして自転車メーカーが直接チームを所有することはなくなった。そのかわり機材スポンサーとなっている。

バブル期の 80 年代後半～90 年代には日立や東芝、パナソニック(当時松下)など日本の電機メ

ーカーがチームを所有し、チーム名もこれら企業名が冠されていた。今の日本経済からは想像もできないことだ。ただ、いずれも現地法人がオーナーとなっていたため、日本がチーム拠点となることはなかったが、もちろん選手もスタッフも大半がヨーロッパ人だった。

蛇足だが、パナソニックは電機メーカーではあるが自転車フレーム製造も手掛けていて、販促の意味合いもあっただろう。これは創業者 松下幸之助が若かりし頃、自転車レースに熱を上げていたことによる。

自転車チームについては、その後も時代の景気を反映して、金融系や通信系、そして IT 系などがスポンサーの主体となって、こんにちに続く。

応援の対象とはならずとも、どのような企業がチームスポンサーになっているか注目するのも面白いし、なにより自転車文化を支える存在として敬意を表したいと思う。

[参考文献]

- Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
『ツール・ド・フランス物語』(デイヴィッド・ウォルシュ著, 三田文英訳, 未知谷, 1997)
『私の行き方考え方』(松下幸之助著, PHP 文庫, 1986)

(当館スタッフ)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスン。多くの方にご利用頂いています。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>